

リトミック指導を通して見た 音楽的諸能力発達の追跡調査 (その2)

柏瀬 愛子

A Follow-up Survey on the Development of Musical Abilities through *Rythmique* Guidance (Part 2)

Aiko KASHIWASE

はじめに

人間の潜在的な音楽性は外部から受ける刺激によって発達し、感性の育成へと発展していく。しかし、年齢不相応な刺激を与えるなどして指導の方法を誤ると、音楽的活動に対する拒否反応を示し、ひいては感性まで乏しいものにさせてしまう。情緒の発達を助け、感性を育むためには「どのような音楽指導をすればよいのだろうか」多くの保育者が悩む問題である。

感受性が鋭い乳幼児期の音楽体験は、幼児をファンタジーや美の世界に引き入れるのに最も適している。また音楽体験は、諸能力の発達を助け、自己認識を形成させる内面的適応力を育てる一方、知覚体験から音楽のルールを知り、社会性、対人関係といった外部への適応性も育む重要な役割を持っている。しかし、幼児教育の段階では、教材の選択や指導の方法がすべて保育者にまかされているため、保育者の音楽的力量、音楽性によって、子どもが体験する音楽経験は大きく左右される。ときには幼児期に発達させたい音楽的諸能力を伸ばすことが出来ず、悪くするとその芽すら摘んでしまうかもしれない。そこで、保育者がもつ音楽性、指導能力と諸演奏技術など、音楽的資質が問われることになる。

子どもの個性を引き出す保育が説かれている昨今、画一的な音楽指導は望ましくない。しかし、音楽活動には集団の場でしか味わうことの出来ない楽しさもある。多勢で得る喜びの体験を糸口とし、潜在している音楽性の開花、延いては諸能力の獲得ならびにその発達を願えば、年齢に応じた適切な題材での集団活動は必須である。この理念の基に、子どもが興味をもって参加してくれるリズム遊び(リトミック)を通し、子どもの音楽的諸能力の発達を調べ、年齢発達に見合った音楽指導のプログラムを企画、確立する「望ましい音楽指導が出来る保育者の育成に役立てる」ことを目的とし、昨年度より継続的に本研究を行ってきた。2回目となる今回は、子どもの音楽性の発達を軸に、昨年度の子どもたちの変化を述べる。

I 音楽性の育ち方

音楽は「聴くことに始まり聴くことに終わる」と言われるように、聴くことを切り離して考えることは出来ない。音を聞き取る器官、聴感覚機能は、人が持つ140億個の脳細胞の中で最も早く(妊娠20週目位)その形態を完成させる。その後胎児は、母親の心臓の鼓動音をリズムとして脳内に刷り込む一方、皮膚組織や羊水を通して人の話し声や生活の音などを捉え、時には外界の強い刺激音に反応するなどしながら成長し、最初の発声活動である産声をもって生まれ

出てくる。人が持っている潜在的な音楽性やリズム感は、すでに母親の体内にあるときから育まれている。このことを踏まえた上で子どもの音楽性の現われ方を分類すると以下ようになる。

1 受動期 (自らの活動が少ない生後1年前後位の乳児前半期)

生後まもなくから表れる音反応は、日が経つに従い明確となりだし、2～3ヶ月頃までには母親の語り掛け (あやし言葉や子守歌など) に対して表情を和らげたり、快い音には手足を動かすなどの喜び行動をとる一方、不快な音に対しては、嫌悪の感情を示し泣き出すなど、音に対する嗜好が持ち出される。3～4ヶ月頃になると、物を握ったり振ったりすることが出来るようになり、与えられた玩具で音出しや声出しをするなど、いわゆる「おはしゃぎ反応」が見られるようになる。次いで喃語の発声が始まると、快感を得たとき大人のイントネーションに合わせるかのような発語がされ、歌うかのような節付けすらされることもある。

周囲の環境に支配され易いが、情緒的反応、音楽的表現が芽生える大切な時期である。

2 発動期 (生後1年前後から2歳位の乳児後半期)

這い這いやつかまり立ち、つたい歩きといった移動行動が取れるようになるため、自分の意志が働き出し、興味を持った物に自分から近づいていくようになる。特に音に対しての興味は大きく、その探求心を満足させるための行動が盛んとなる。生活の中にあるさまざまな音を声や身体を使って模倣したり、リズムカルな発音を好み (簡単な童謡やわらべ歌など) 身体表現をもって反応するなど、身体の筋肉や神経の成長と共にリズム感の成長も見られる時期である。

3 模倣期 (幼児期前半に目立つ行動である)

幼児期に入り自我が目覚め出すと、自分の周囲に起こるあらゆる事象に興味を示し、それを真似ることによっていろいろな知識を獲得していくが、未だ自分の考えたことや感じたことを表現するまでには至らない。すなわち、周囲の人に同調する同一化現象状態にあるので、接する人の感性によって子どもの感性も左右される。また、その後の表現活動にも影響を及ぼす。

歌唱表現は言葉の発達に伴い歌い出されるようになる。先ず聴いた歌を真似ることからはじめられるが、1曲を正しく歌い切ることは出来ない。曲の中で気に入ったメロディーや言葉に接すると、その音韻の反復をして言葉が持つリズムの楽しさを味わっている。また、遊びの中で自分の思い付きを無意識に口ずさんでいることも多い。その場合の歌は、自分が面白いと思った音のまともに、知っている言葉を割り当て即興的に歌うもので意味の無いものが多い。そのため、大人目から見ると「でたらめ歌」となるが、子どもは自分の状況にふさわしい音楽的自己表現をして楽しんでいるのである。歌唱活動をスムーズに受け入れさせるためには、こうした行為が重要な過程となる。子どもの創造歌を容認し、時には誉めることも必要である。

4 活動期 (3歳後半～就学まで)

個人差はあるが3歳後半頃になると、これまでに経験してきたことを土台として、自発的に行動しようとする姿が見られるようになる。身体的な発達に伴い、さまざまな移行運動 (歩く、走る、スキップ、ジャンプ、ホップ、他両足跳び、けんけんなど) が出来るようになると、音楽に合わせて踊ることを喜び、同じ動きを繰り返すことによって技を高めていく。

リズム感が一層鋭敏となり、かなり複雑なリズムでも模倣したり再現することが出来るようになる。演奏活動に対する興味を持ち出し、既製の打楽器をはじめ身近にある物での音出しや合奏を楽しむようになる。また、旋律楽器での探り弾きにも関心をもち、簡単な曲なら一人で弾きこなしていく。音の比較や見知っている楽器音の聞き分けも出来るようになる。

語彙が増えるに従い歌唱能力が増し、いろいろな歌が正しく歌えるようになってくる。しかし、声域の発達が伴わないため音域幅の広い曲では音程を外すことが多い。

友達との交流が次第にスムーズになりだすと、集団遊びをはじめ音楽的な活動を喜び、その中で自分が考えたことや感じたことを自分なりの表わし方で表現するなど、創作的な行動がみられるようになる。

この活動期はさまざまな体験を得ることで、自らの音楽性を試すと共にその音楽性を豊かにして行く時期でもある。すなわち「活動期＝発達期」であり、ほぼ全般に渡る音楽活動が容易に行えるようになっていく。

以上、大まかな音楽性の現われ方を述べてきたが、いま少し年齢別で律動的な楽しみとしての音楽遊びに関する発達（身体表現、音楽表現）の過程を示す。

Ⅱ 年齢別に見た発達の特徴

1 身体表現の発達（音楽活動と関わりの深いものを示す）

年齢	発達の特徴（可能となる発達行動の目安）
0歳	手足の動き・首の動き・足を投げ出し座る・はいはい・つかまり立ち・つたい歩き
1歳	歩いたり走ったりが出来るようになるがよく転ぶ・立ったり、しゃがんだりする行動がスムーズにできるようになる・簡単な動きなら真似ることが出来る
2歳	転ぶことが少なくなる・音楽に合わせて歩こうとする・音楽に合わせて自由な表現をする・両足跳びやタップ、早足歩き（ギャロップ）が出来る・律動的な反応が多くなる
3歳	片足立ちが出来る・音楽に合わせた移行運動がスムーズになってくる反面、美意識を持ち出し緊張から一時的に動きを嫌うこともあり、よく転ぶ・集団より個人の動きを楽しみ、自己表現の誇示をするようになる
4歳	音によく反応し、バランスをとった動きを好む（平均台など細いところを歩きたがる）・友達と動きを合わせることを楽しみ出し、リズムカルなダンスを好む・ホップ、スキップ、ジャンプ、ワルツなど複雑なステップが踏めるようになる
5歳	動きの調節が取れるようになり、表現に無駄がなくなる・階段を降りるとき足を交互に使うようになる・集団での遊戯を好むが、自己表現の誇示も一層強くなる
6歳	音楽への反応が一層スムーズになり、動きもきれいになる・音楽に合わせて、いろいろなステップがスムーズに踏めるようになる・行進隊形を変えることが出来る・リズムの変化に伴いステップを踏み替えていくことも出来、ダンスや音楽のあるゲームを好む・個人差はあるが力走すると大人を負かすほど早く走る

身体表現は情緒に連なる自己表現であると同時に、人の行動の基盤でもある。活動の広がりに伴い、知的発達が促されると精神生活への広がりも見られだす。また、さまざまな体験を通して友達との関わり合いが持ち出されると、社会へ適応する力（社会性）も備わり出す。

成長の過程を心して把握し、諸発達を促すことが出来る刺激が与えられねばならない。

2 音楽表現の発達

年齢	発達の特徴（可能となる発達行動の目安）
0歳	快い音と不快な音の区別をもつ・人の声に反応・喃語の発声が始まると、興味を持ち気に入った音に共鳴したり、単調で短い擬声語的音節、単語のイントネーションに従った発声をするなど発声遊びが盛んにされる・声に表情や抑揚が付きだす
1歳	音楽に合わせて身体をゆする・保育者を真似ながら簡単な手遊びが出来る・簡単な歌なら真似て歌う・いろいろな物の音を探索、自分に快い音を探す・音反応が早くなる

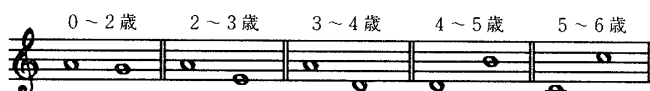
2歳	1つの曲を繰り返し聴きたがる・気に入ったメロディーが遊びの中で自然に歌われる・音楽に合わせて踊る・簡単な歌を覚えて歌う・即興的な歌を歌う (でたらめ歌)
3歳	音楽に調子を合わせ歩いたり走ったりが出来るようになる・自由な踊りを好む・話し言葉にも節付けする・よく歌う・単純で短い歌なら1人でも完全に歌いきることが出来る・打楽器に興味をもち、音出しを喜ぶ (2~3種類の楽器で合奏が出来る)
4歳	ラジカセの扱いを覚え、自分の好みの歌曲をセットして聴くようになる・歌曲に合わせて踊ることを好む (特に女兒に多い)・ストーリー性のある歌を好み、正確に歌えるようになる・曲や楽器音の聞き分けが出来るようになる・旋律楽器に興味を持ち出し探り弾きをする (簡単な曲なら弾きこなす)
5歳	声域が広がりいろいろな歌が歌える・歌に表情を付けることが出来るようになり、歌声がきれいになる・楽器演奏に対する興味が一段と増す・即興や合奏を好む・難しいリズムにも反応出来るようになる・歌を劇化することを好む
6歳	音楽するのに必要な3要素をはじめ副次要素も理解しはじめる・合唱、合奏の楽しさが分かり出す・創作活動を喜ぶ・愛好歌曲のレパートリーが広がる

子どもの音楽活動の中で最もメインとなるのは歌うことである。乳児期でも音楽的なよいムードがある場合、自分の鼓動のリズムに乗って発声される。言葉の習得に伴い気分が乗ったとき心地よい発声で情緒にあふれた表現をしながら、ごく自然な歌い出しがされることが多くなる。気の向くままの歌い方であるため技は拙いものである。

歌唱技術は音域の発達と発音、発声、音感、リズム感などに関係するので、安定した声で歌えるようにさせるためには声域の発達を促すことが大切である。

就学前の子どもの声域発達は、産声として発声された1点音Aの音が基準となり、次のような発達をしていくが、男女差や個人差があることは否定できない。

各年齢の声域を五線上に示すと次のようになる。



3 音楽的知覚と情緒反応の発達 (幼児の表現活動、第1章頁18より抜粋)

年齢	音楽的知覚と情緒反応の発達
0歳	音に対する聴覚的集中力が生じ、情緒反応が始まる
1歳	音楽に聞き入り情緒的応答ができるようになる・曲の違いが分かる能力が持たれ出し、好きな曲に対し身体で反応する
2歳	音楽を聴こうとする意欲が生れ、響きの変化を聞き取る・音楽的印象が豊かになる・好みの曲を繰り返し聴きたがる
3歳	音楽に対する興味が増し、感覚能力が鋭くなる・音楽的印象がより豊かになる
年中児	音楽的印象の広がりに伴い美的感覚が持たれ、情緒的反応が育つ・音楽を構成している要素 (高低、強弱、リズム、音色など) の理解・聴感覚が鋭くなる
年長児	音楽に合わせて友達と一緒に活動することを好む (歌う、弾く、踊る) など・情緒反応が鋭敏になる・声域の発達に伴いメロディー感が持たれるようになり、音程が正しくなる・リズム感、音色感、強弱感の発達・歌曲の表情理解が出来るようになる

幼稚園のクラス編成で言う年中児は4, 5歳児で年長児は5, 6歳児である。

4 演技・演奏能力の発達

（乳幼児の表現活動、第1章頁18より抜粋）

年齢	演技・演奏能力の発達
0歳	保育者が音楽や子守り歌に合わせ、リズムカルに揺すったり軽くたたくなどして、動く土台となる力を育む→リズムカルな手足の屈伸で音楽に反応・擬声語の発声
1歳	保育者が遊びや歌を通して、音楽と動作を一致させる力を育む→音楽に対するリズムカルな反応（身体での表現と打楽器での表現）・言葉のイントネーションに従った発声（歌う）衝動的な動きが多く、技も拙いがリズムには乗っている
2歳	基本的な表現力が出だし、リズムカルな動きが多くなる・簡単な歌は真似て歌う
3歳	リズムカルな動きが音楽に合わせて表現出来る・伴奏に合わせて歌えるようになる・楽器へ興味を持ち簡単なリズム演奏が出来る
年中児	発音が明瞭になり、歌声に抑揚が付けられるようになる・音楽的諸感覚の発達が見られる（特にリズム感が著しい）・創作的な活動を喜ぶ（替え歌を作ったり、動きの即興）・打楽器への興味が大きくなり演奏することを好む・旋律楽器（鍵盤楽器）の探り弾きが出来る
年長児	歌に表情が付けられるなど、歌唱表現が上達する・身体表現に演技力が備わり、目的を持った動きが出来るようになる・多人数での合奏が可能となる

発達は個々の子どもの生い立ちや環境、個性によって異なるものである。これまでに述べてきた発達の過程は1つの目安であって固定化されるものではない。しかし、情操教育として音楽教育の位置づけをするならば、その発達は出来るだけ目安に近づけるよう努力すべきであり、発達を促すためにも適切な刺激を与えてやらねばならない。

Ⅲ 音楽的諸能力の発達診断

ダルクロワーズの音楽教育法（リトミック）に「豊かな感性と音楽性を育み、その発達を助長させる」と提唱されている。そこでリトミック指導を受けた子どもたちがどの程度の音楽的諸能力を持っているかを見るために、音楽適性診断テストで能力測定を試みた。なお、使用した音楽適性診断テストの仕組みや概要は、前報（柏瀬・1997）「リトミック指導を通して見た音楽的諸能力発達の追跡調査（その1）」で述べたのでここでは省略する。

1 リトミック指導を受けている子どもたちのテスト結果

① テストの対象者と実施方法

テストの対象者は、本学付属幼稚園年中児。在籍者数は（男31名・女39名・計70名）であるが、当日欠席者がいたため実際の被験者数は（男29名・女32名・計61名）であった。今年4月に入園してきた数名を除けば、前年度のゼミ学生によって年少組の時リトミック指導を受けた子どもたちである。

実施方法は、テストが○×の記入方式であるため、クラス別で男女を分け、子ども同志で相談したり解答を見せ合ったり出来ないような配置で机に向かわせた。なお、このテストは質問がすべてテープレコーダーによってなされるもので、指導者は質問に対する話は一切することが出来ない。解答用紙のページが間違っていないかの確認をしたりするなど、補助的な役割をするのみである。解答記入には自分の好きな色のクレパスを使用させた。

② テスト実施項目

テスト項目は全部で6種目であるが、全種目の実施は年齢的に未だ無理があると思われるので、

これまでに活動経験がある3種目（音の強弱感、リズム感、音高感A・B）の測定とした。

③ 実施時間（午前10：00～11：00）

子どもたちに落ち着きがあり物事に集中出来る時間帯だと見て、この時間を設定した。1グループ約15分を目処に置き、1クラス2グループの4回分である。

④ 実施日 1回目 平成10年5月14日（木）・2回目 平成10年7月9日（木）

簡単なテストなのに2回に分けた理由は、慣れない経験（テスト）に対する子どもの心理状態と、園側の保育の流れを考慮したからである。両日とも欠席者は9名であった。

⑤ テストの結果とその考察

イ 項目別得点の一覧表（数字は人数を表わす。）

得点数	4点		3点		2点		1点		0点		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
男女別											
強弱感	8	11	4	8	9	8	1	1	7	4	61
リズム感	0	2	3	8	11	10	5	7	10	5	61
高低感A	5	4	5	10	10	14	7	0	2	4	61
高低感B	1	0	4	5	15	18	4	5	5	4	61

質問の数はそれぞれ4問ずつで、評価は正解に対し1点が配点される。なお、高低に関しては、質の異なる問いのAとBの各得点が2分されそのトータルを最終的な得点数にするのだが、ここでは音の質を聞き分ける力も見たいと思い、一応AとBを分離して評価し、評価段階に換算するとき2分することにした。なお、強弱感、リズム感は得点＝評価段階となる。

ロ 高低感の総合評価点一覧表（該当者がいない最高点は省略）

得点数	男	女	得点数	男	女
3	5	5	1	2	2
2.5	6	11	0.5	2	1
2	10	8	0	1	2
1.5	3	3			

ハ 3項目の個人総合得点一覧表

得点	男	女	得点	男	女	得点	男	女
10	0	1	6.5	2	4	3	1	2
9.5	1	0	6	3	2	2.5	1	0
9	2	3	5.5	1	1	2	0	1
8.5	1	4	5	2	4	1.5	2	1
8	2	1	4.5	2	0	1	1	0
7.5	1	3	4	3	1	0.5	0	0
7	3	4	3.5	1	0	計	33	28

以上が今回実施したテストの項目別得点結果と個人の総合得点結果である。音楽能力の診断は、個人の得点をまず評価点に換算、次いで評価段階（3段階評価）ならびに音楽能力段階（5段階評価）に換算して発達の度合を見るのであるが、今回はテスト内容を分割しているため、総合的な5段階評価には持ち込めない。そこで項目別に表わす評価段階の判定のみにとどめた。なお、一定期間をあけて同じテストの実施を行えば、音楽性の発達度合いは、より明確化されていくので年長に進級してから再度テストの実施を試みたい。

ニ 3段階評価換算表（（）内は評価の配点・パーセントは四捨五入とする）

評価段階	1（0～1）		2（2～3・リズムのみ2）		3（4・リズムのみ3～4）	
項目	男（%）	女（%）	男（%）	女（%）	男（%）	女（%）
強弱感	7（11）	6（10）	13（21）	16（26）	9（15）	10（16）
リズム感	13（21）	14（23）	12（20）	9（15）	4（7）	9（15）
高低感	9（15）	7（12）	20（33）	25（41）	該当なし	該当なし

ホ 考察

3段階評価に換算した得点は、芳しいとは言い難い結果であった。しかし、1項目ずつについて検討してみると、音楽的感覚の中で最も基本的なものの1つである強弱感については、かなり好ましい結果が得られたと思う。ただ、1段階の該当者の中には、無回答や全部に印を付けているなど「強い」「弱い」の言葉の意味がしっかり理解されなかった可能性もあり、補足説明の必要性を感じた。普段の動きでは上手に反応出来る課題であるだけに不思議に思う。

高低感では最上位のランクに該当する者がいなかった。しかし、被験者の3分の2以上が2段階に位置している。このことは、リズムと高低が組み合わされて旋律に発展したときに生じる、メロディーを理解する力が芽生えていると解釈できる。与えられた音に反応し、音をはずす（俗に音痴と言われる）ことが少なければ、歌唱メロディーに従った音表現も正しく出来る。当然、歌が美しくなるので、歌うことに喜びを感じ歌唱表現能力を向上させていく。

リズムは音楽の基盤であり最も大切なものであることから、リトミック指導の中でも力を入れていた。実践時の反応では比較的良好と見ていたが、テスト結果は散散なものであった。本テスト問題は、太鼓で打つ2つのリズムを瞬時に比較しなければならない。しかも、音が流れる時間が短く1度きりである。今回の結果が思わしくなかった理由として考えられることは、リズムの違いを聴き取るには、強弱感と長短関係の結びつきを素早く把握しそれを記憶することが要求されるが、これまでの指導では、音を注意して聴いていなくても、友達の真似をすることで解決されていた。さらに、必要に応じて繰り返しや、指導者が共に活動するので提示されたリズムを記憶する必要がなかった。このように常に友達と行動を共にし繰り返すことに慣れていた関係から、瞬時の聞き取りと比較という経験に1人で挑戦する自信が持てなかったであろう。今後の指導では、聞き取ったリズムを個々に打ち返しさせたり、リズム唱を取り入れるなどし、惰性の表現ではなく、記憶して表現するようにさせたい。

全体的な反省として実施時の環境不備があげられる。他の園児（年長、年少）が戸外遊びをしていることや、途中でお茶を飲みに入ってくる（同室の被験者外）子がいたり、テスト中に排便に立つ子もいたりし、気分的に落ち着くことが出来なかったのではないと思われる。また、戸外の騒音からテープの音もやや聞き取りにくかったように思われた。こうしたテストを実施するときは、静かな環境で行うべきであろう。次いでテストの実施時期であるが、クラスの安定度や子どもの心理的発達程度から見て少し早かったように思う。いま少し実施時期を遅くしていたら、良い結果が得られたであろう。その理由は、正解が分かった様子が見受けられていたのに記述されていない解答用紙が多かったことである（介助の学生による個別チェックからの判断）。今回使用しているテストは、質問がテープで流されるだけなので、記述作業は即時的反応を要する。ぐずぐずしていたら次の問題へと進んでしまう。ためらい行動は認められない。こうした傾向が薄らぐには時間が必要だと思う。ちなみに夏休み明け（9月初旬）同年

年齢の子どもに同テストを実施し結果を比較してみた。

対象とした園は春日井市のH園で、年中児数61名である。当日の欠席者を除き被験者数は57名であった。園の立地条件や環境などの違いはあるが、保育内容は付属園に共通するものがある。ただ、年中児全員でリトミックの指導を受けた経験はない。テストの実施は、付属園での反省を踏まえ、各クラスが保育活動に入り園舎が静かになった時間にクラス全員で受けさせてみた。面識がない子どもたちであったが、真剣な態度から手応えを感じた。参考までに得点結果を掲載するが、項目別、ならびに個人総合を省略し、3段階評価に換算した表のみとする。

H園の評価段階換算表 (() 内は評価の配点・パーセントは四捨五入とする)

評価段階	1 (0~1)		2 (2~3・リズムのみ2)		3 (4・リズムのみ3~4)	
項目	男 (%)	女 (%)	男 (%)	女 (%)	男 (%)	女 (%)
強弱感	3 (5)	3 (5)	11 (19)	15 (26)	10 (16)	15 (26)
リズム感	6 (11)	1 (2)	10 (16)	12 (21)	8 (14)	20 (35)
高低感	3 (5)	6 (11)	17 (30)	26 (46)	4 (7)	1 (2)

3項目とも1段階に該当する子どもの数が少なく、2段階を頂点に3段階にもかなりの人数を見ることが出来る。特に女兒のリズム感が高得点を出していたのには、特別な音楽教育はしていないと聞いていただけに意外な思いであった。H園のテスト結果が良好であったことは実施時の環境が良かったので、テストに集中することが出来たからだと思う。

次回、付属園で実施するときはこの点を配慮したい。

Ⅳ 園以外での音楽環境調査 (アンケート) から

子どもの生活の場は、当たり前のことであるが園よりも家庭にある。園生活でどんなに理想とする音楽環境の中に置かれていても、家庭で音楽と無縁の状態であればスムーズな音楽的諸能力の発達は望めない。そこで、子どもが家庭で示す音楽に関する関心度や感性教育に対する親の考えなどを調査してみた。回収率はF園96%、H園93%であった。合わせて報告する。

イ 年中在籍者の出生位置

	長男	次男	三男	長女	次女	三女	計
F園	20	8	1	27	9	2	67
H園	19	3	0	26	7	0	55

両園とも圧倒的に長男、長女が多かったが、有子数や兄弟関係では次のような数が得られた。

ロ 有子数

	一人っ子	二人兄弟姉妹	三人兄弟姉妹	四人兄弟姉妹
F園	8世帯	42世帯	16世帯	1世帯
H園	9世帯	39世帯	7世帯	0世帯

ハ 兄弟、姉妹の関係 (左側男児・右側女児)

	兄		弟		姉		妹	
F園	8	15	5	7	8	9	6	7
H園	2	8	9	4	6	6	2	9

有子数やその構成から、比較的若い両親が多いと判断される。なお、現時点では1人っ子であるが、年内に兄弟が増える予定と記されていた子もあったことを補足しておく。

ニ アンケートの質問③家庭で歌をよく歌うか、④それはどんな歌か、⑤どんな時に歌うかの質問に対しては、③を除き複数回答とした。紙面の都合で質問内容は省略し得られた回答数のみ記載する。

	③イ	ロ	ハ	④イ	ロ	ハ	ニ	⑤イ	ロ	ハ	ニ
F園	4 4	2 3	0	4 8	4 3	1 5	3 2	6 7	2 3	1 6	3 3
H園	3 6	1 9	0	4 0	3 5	9	8	4 6	2 8	1 0	2 0

③④⑤の数字は質問の番号で、かたかなは質問の項目を表わしている。

家庭での子どもたちは、遊びながら幼稚園で覚えた歌や、テレビで覚えた歌などをよく歌うようである。また、散歩やお使いに出かけたとき歌うと言う答も多く見られている。同伴者と一緒に歌われたなら楽しさが増すことであろう。歌われていることを期待する。

ホ 稽古ごとに関する質問は両園とも60%強の人がしていると答えていたが、その内容は水泳、英語、習字、体操といったものが大半を占めていた。音楽に関わるものとしては、ピアノ、バイオリン、チェロ、リトミック、バレエなどがあげられていたが、全体の15%弱であった。兄、姉がしている稽古ごとに関しても同じような傾向が見られた。また、稽古ごとをさせるとき「親の考えで」と言うより「子どもがやりたがったら」という答が多かったことは、好ましいことである。しかし、その気持ちにさせる仕向けの方法が、どのようにされるかが問題である。もう少し詳しい状況を聞けばよかったと後悔している。

ヘ 両親の音楽嗜好と経験

音楽が「好き」と答えている率は父親（F園73%・H園51%）より、母親の方が高く両園とも85%を超えていた。好みのジャンルは、ポピュラー、クラシック、ロック、ジャズ、流行歌、他、さまざまであったが、両親が何らかの音楽を愛好する趣味を持っていることは好ましいことである。「嫌い」と言う回答は1名のみで、後は「どちらでもない」であった。

「過去に音楽の稽古ごとをしたことがあるか」の問に対しF園72%・H園52%の方が「ある」と答えていた。そのほとんどは鍵盤楽器（ピアノ）であったが、弦楽器（ヴァイオリン、チェロ）管楽器や声楽、琴、三味線などもあげられており、幅の広さを感じさせられた。ただ、両親のどちらが習ったのかを問わなかったことは失敗であった。また、学生時代に合唱や吹奏楽など、音楽に関するクラブ活動に参加していたという答も多く見られたが、上記同様両親のどちらであったかがはっきりしていない。設問をいまいし具体化しておくとうよかった。

ト 家庭での保有楽器

「家庭に楽器があるか」の問に対し「ある」の答えが70%強（両園とも）であった。楽器の種類は鍵盤楽器（ピアノ、エレクトーンなど）が一番多かったが、フルートやチェロをはじめ、いろいろな楽器の名前があげられていた。そのほとんどは、両親が「習ったことがある」と答えていた楽器と結びついている。おそらく思い出の愛用楽器として手元に置かれているのであろう。なお、これらの楽器の中には鍵盤楽器のように、現在稽古をしている兄や姉、在園児自らによって活用されているものもある。親子2代の利用、好ましいことである。この他にも、子どものために買い与えられたと思われる簡易楽器（メロディオンや木琴、すず、タンバリン、他）の名前がいろいろあげられていた。自由に鳴らすことができる楽器が身近に置かれていることは望ましいことである。遊びの中で活用されることを期待する。

チ 調査に対する考察

過去に音楽習得の経験があり音楽を好む両親が多いことや、子どもたちが園で覚えた歌を始め、いろいろな場でいろいろな歌をよく歌うことなどから判断すると、家庭にある子どもたちの音楽環境は比較的良好と考えられる。特に兄弟が、何らかの音楽レッスンを受けている場合、少なくとも日に1度は音楽(音)を聴く機会が持たれるであろう。そうした子どもたちが、ひょっとしたら楽聖モーツァルトが幼い時、姉ナンネルンのピアノ練習がすむとすぐその曲を真似て弾いたと言う話のように、兄弟が弾く曲を真似弾きし、音と遊んでいるかもしれない。

楽器での音出し遊びは、音を聞き取る耳を作る上で(絶対音感の獲得)大切なことである。保育の中でもメロディオンなどの鍵盤楽器を使って行うことがあるが、音に関心が持てない子にとっては、苦痛な活動でしかない。激しい個人差が出るこうした活動は、一斉にさせるより家庭であるいは特殊な場(音楽教室)で個々にされる方が力もつき効果が期待される。

稽古ごとに対する親の考えは妥当だと思う。親の希望で無理強いするより、本人の自発的な意志が尊重されれば、責任を感じ頑張る気持ちを持つのではないだろうか。一旦始められた稽古ごとは、適切な励ましと賞賛を与えながら、長続きするように見守ってほしいものだ。

アンケートを集計する時点で、質問項目が曖昧であったことに気付いた。特に両親の音楽嗜好に関する質問に不手際が多かったと思う。音楽鑑賞に関して一切触れていなかったことも残念である。今回の反省を踏まえ、聞きそびれた事項を今1度違った形で調査してみたい。

V リトミック教育の実践から

本学付属幼稚園でのリトミック指導も2年目を迎えた。今年度の対象児は、昨年度リトミック活動を経験した4歳児である。音楽的諸能力の発達を促すためにも充実した指導がされねばならない。そこで、昨年度のねらいを反芻し、今年度のねらいを次のように設定してみた。

1 今年度のねらい

- ① 集中力、聞き取る力、判断力、敏捷性などを高め、心身の一致、調和を図る。
- ② イマジネーションを持たせ自己表現力を高める。
- ③ 伝承的な遊びを通して、いろいろな表現の形を知らせる(身体の意識化)。
- ④ 前年度設定されたねらい(基本的な動きのスムーズ性・豊かな創造性の獲得・音楽的技能と概念の把握)も継続させ、その徹底を図る。

2 年間計画の作成

年間計画は、1活動での繰り返しを度々させたいという考えから、学期を1単元とした昨年度に対し、今年度はいろいろな経験をさせようと思い2ヶ月を1単元とした。なお、1単元とは同種の活動を繰り返し経験させていく期間のことを意味している。

使用教材の決定、配列も、昨年度は市販のテキストより選択、抜粋したものであったが、今年度は子どもの反応をみながら教材を決めることにした。従って、年間計画では活動の主なねらいのみを示すものとし、教材の記載を避けた。参考までに今年度の年間計画を記載する。

リトミック指導を通して見た音楽的諸能力発達の追跡調査（その2）

活動のねらいを示した年間計画

月	指導の内容（ねらい）	活動分野
5・6	リズムと音（高低、強弱、速度）に対する反応を高める	リ、即、音
7・9	身近な事物や動物などの表現を通し、身体の意識化を図る	身、創、即、リ
10・11	音の聴き取り・基礎リズムの名称と音符を知る	リ、音、即、身
12・1	活動のまとめ・リトミック音楽劇・創作活動	リ、即、音、創、身

（注）活動分野欄のリ＝リズム、即＝即時反応、音＝音に関する活動、身＝身体表現、創＝創作の略である。

指導の内容（ねらい）が一応2ヶ月ごとで区切られているが、リトミックのねらいである「よいリズム」を獲得させるためには繰り返しが必要であるから、今年度も昨年度と同様、1度経験させたことは何らかの形で時々復習させていくものである。その場合、昨年度は同種の活動は同じ教材を使って行ったが、今年度はその都度教材を変えることにしてみた。その理由は、応用力の育成を図るためである。

活動の継続期間ならびに教材の指定を避けたことが、昨年度の計画と今年度の計画の違いである。どちらの方法が子どもの活動を活性化させていくことが出来るか。今年度の指導が終わった段階で検討し、次回の年間計画作成に持ち込みたい。

3 子どもの反応と変化（発達）の状態・考察

実践指導の手順や方法などは昨年度と同じであるから詳細は省略し、ここでは現在までの指導で得た子どもたちの反応、変化（発達）の状態など考察を含め述べる。

① 基本的な動きに対する反応状態と変化

基本的な動きとは、音を感じいろいろなリズムに合わせた身体表現をすることである。子どもは無意識で反射的に動くことが多いので、自分が今「どんなリズムに合わせて」「どんな動きをしているのか」を知らせていく必要がある。そのためには、身体各部の可動範囲を広げ、表現体としての身体をつくらせねばならない。すなわち身体の意識化と基本的な動きの獲得をさせていくものである。その指導は、歩く、走るなどの自然な移行運動にはじまり、様々な遊びを通して音や合図に即時的に反応していく方法がとられ、速さと正確さが要求される。

リトミック指導を開始した当初は、単純なリズム表現や簡単な遊びにはすぐ反応されたが、一寸複雑な動きになると反応してくれなかった。リズムに合わせた身体表現も模倣のみで終わることが多く、常に指示が必要であったが、秋頃から子どもの行動に変化が見られ出し、指示がなくてもリズムの変化に反応出来るようになっていった。動きにも、スムーズさが出だし回を重ねるごとに上達していくのが感じられた。また、遊びも楽しんでするようになり、復習的な活動には正確さと、発展的な表現、創造的な動きなどが見られるようになっていった。

年少から年中へと進級した時点での子どもたちの行動変化は著しく、9月現在では身体を使っている表現も豊かになり、いろいろなリズムに素早い反応がされるようになっている。

② 音の高低や強弱などの音楽的技能と概念に対する反応

イ 音の高低感

ピアノでの最高音と最低音には初めから素早く反応されたが、音の間隔を狭くしていくと反応は鈍っていった。しかし、集団で活動しているため、聞き分けることが出来た子どもによってリードされ、高低表現は次第に正しいものとなっていくのだが、それは模倣であり自分で感じ取った行動ではない。いろいろな遊びを通し高い音、低い音に関心を持たせ感知力の育成に

努めてはみたが、成果は上がらなかった。特に笛や擬音などでの高低は感知できないことが、年中になってから実施した諸能力診断テストの結果で明らかにされている。

ロ 音の強弱感

強弱に対する感覚はほとんどの子どもが持っていたが、強い音は大きい音、弱い音は小さい音と解釈していた。また、表現方法が分からないため「今はどっち」の問いに対して「強い」「弱い」が正しく答えられるのに、身体表現では強い音も弱い音も同じ方法で現してくる。そこで表現の方法を会得させるように仕向けたところ、次第に強弱感を現すことが上手になっていった。現在では弱い音を聞くと腰をかがめたり、背伸びをして細かく歩くなどいろいろな表現を見せてくれる。もちろん強い音に対しての表現も以前の表現とは変わってきたので、創造性が持たれ出す今後の楽しみである。

ハ 速度感

基本的な動きの項でも述べたように、当初一定の速度に合せた動きは取れるが、途中で速度が変わると動きが止まってしまう子どもが多かった。この傾向は、年少の秋頃から次第に無くなり速度の変化に対応出来るようになり、現在では頻繁に変えられる速度にも反応し動くことが出来る。しかし、早くなっていく速度に対しての反応はよいが、遅くなっていく速度に対する反応は芳しいとは言えない。特に全音符に対する反応が悪く歩みがばらばらになってしまう。「長く伸ばさねばならない」ということは、気持ちの上では理解されているようであるが、拍の間に正しく数えることが出来ないのと、ふざけからくる場合もあると思われる。この拍の間の数え方は、個々の脈拍の違いからくるものであるから、まちまちとなるのはやむを得ないことである。大人の場合でも1つの速度を継続して打ちつづけた場合、ほぼ30秒を境に速度は次第に早められていくように、一定の速度が次第に早くなることは人間がもつ自然本能で習性であるとも言われる。子どもの場合、変化のないゆっくりした音が次第に早くなってしまふのは仕方ないのかもしれない。正確な速度感を育成するためには、常に正しい音による援助を与え拍間の統一を図ることが大切である。今後の課題としてその方法を検討していきたい。

ニ リズム感と拍子感

最初の頃は、簡単で一定のリズムパターンが続く場合には活動に参加しているが、リズムが変わるとやめてしまうなど、与えられたリズムにすぐ反応出来る子どもと、出来ない子どもとの差が激しく、基本リズムの形から変形に発展させられず、毎回足ふみ状態であった。

指導4回目に取り入れた拍と合わせた言葉「まねっこ（呼ばれた動物の鳴きまねをする）遊び」に、子どもが興味を持ったことがきっかけとなり、リズムへの興味が持たれるようになりだした。一旦興味を持つと子どもたちの習得は早い。秋には異なった数種類のリズムパターンを続けても、途中で止まることなく打ち続けることが出来るようになっていった。さらに、リズムの違いを聞き分けることや、拍子感覚も持ちだし1拍1語の遊びが出来ようになっていった。しかし、高低感の項でも述べたように集団での活動である。自分が理解していなくても友達のを真似ることで処理されていく。また、指導者側も理解度を見落とすことが多い。リズムと拍に対する個々の認識を深めるためには、ダルクローズが考案した音符カードの遊びを取り入れていくべきであろう。

ダルクローズは自分の論文の中で「音楽の文字である音符は出来るだけ早い時期から知らせるべきだ」と説き、その呼称を擬人化（四分音符＝くろちゃん、八分音符＝はたちゃん、二分音符＝しろちゃん他）している。これは、音符に親しみを持たせ呼びやすくしているものである。この音符カードに合わせ音符積み木の遊びも取り入れていけば、音符の長短関係を知らせ

ることが出来る。この音符の長短関係を知ることは速度にも関連してくるので速度感の育成にも役立つものである。

拍子に関しては単純拍子である2拍子から導入、3拍子へそして4拍子へと進めていく。今のところ複合拍子は扱っていない。2拍子は、人の呼吸に合った基本リズムの形であり、子どもの好む動物の名前が入り易く強弱感も把握させやすい。

昨年度、繰り返し体験させた2拍子感は、理解され拍子感の下地となっていることが、拍子に対する子どもの関心度から伺われる。ワルツステップのリズムとなる3拍子も、時間をかけ理解されるように仕向けたい。

ホ 創造的な表現

年少児のリズム活動では歌うことをはじめ、すべての活動が模倣ではじめられる。しかし、同一教材で同じ活動を繰り返し行わせているうちに、表現の方法が自然に変えられていくことがある。それは、自分がこれまでに体験してきたことの中から気に入っていることを表現したいという気持ちの表れから起こるものである。

幼児の創作活動とは、自己が獲得した表現の能力を披露することであり、そこから子どもの内面性や社会性ならびに個性の発達が促されていくので大切な活動の一環である。

音楽や動き方に対する好みや感じ方は個々の子どもによって違っている。リトミック指導は同じ表現を求めるより、子どもの自発的な表現を引き出すことに重点を置いている。そのためには体験したことが身に付くようにさせることが肝要である。

昨年度初期の活動は模倣で終わることが多かったが、成長の兆しが出だした秋頃からの表現には、創造的な活動がよく見られるようになっていった。未だ実践回数はあまり多くないが、年中組になってから行っているリトミックは、年少組のときに経験した活動の思い出をさせ、次いで変化を持たせた新しい課題を与えるなどし、経験内容を広げるように心がけている。そのためか、いろいろなところで自己主張するようになり豊かな想像性を発揮してくれている。芽が出だした想像力、このまま伸ばしていきたいものである。

子どもたちの様子を見てみると、経験があることに対しては「知っている」という安心感を持つらしく、スムーズな動きや発展性も見られる。年少の時に得た経験が自分のものになっている結果なのだろう。今後、経験させたい活動内容は、応用的な課題も含め次第に難しくなっていく。子どもの興味や活動意欲が失われないようにしていきたい。なお、教材の選択、活動の決定をするとき、机上の計画にとどまらず、通常保育の中で行われている表現活動との兼ね合も考えに入れることが必要だと思う。そのためには園側とのコミュニケーションを密にし、扱われている音楽教材をはじめ、子どもの普段の状態をよく知った上で企画すべきであると痛感している。今一つ、活動に対する嗜好が出だしてくる年中児の教材は、音楽的知覚を発達させるようなものを選びたいが、動きを伴う表現活動の場合は、初体験に対する取り組みの意欲や技に個人差が現われ出し、優越感や劣等感を抱く原因ともなるのでこの点も配慮しなければならない。

おわりに

心身の調和を図り諸機能力の成長を助ける教育として、保育界で脚光を浴び出しているリトミックではあるが、その全容について未だよく理解されていない節が感じられる。特に「特別な訓練を受けなければ指導が出来ない、難しい教育法」と思い込まれているようである。それは、リトミックを指導するに当たって大切なことが、指導者自身の感性や知性が豊かであるこ

とをはじめ、想像性、創造性を持たねばならないこと。そして、すべてに柔軟な対応が必要だからである。すなわち、人間育成を目指すリトミックが求めている諸能力（集中力、思考力、反応力、反射性、自動性等）の獲得と、子どもの反応に応じた楽器演奏（即興演奏を含める）の技が必要であることを知るからであろう。もちろん、訓練を受けた有資格者によって段階的な指導がなされていくなれば、子どもが持つ潜在的な音楽性は容易に引き出され伸ばされていくと思われる。望ましいことであるが現教育情勢から見ると不可能なことでもある。

「リトミックは特別な音楽教育」と解釈されがちであるが、リトミックは音楽教育だけに止まるものではない。リズム運動が扱われる関係上、音楽が基盤となるのはやむを得ないがその学習活動は、子どもを取り巻く身近な事象全般に及んでいる。むしろ一般教養の系列に属するのだとも言える。特に情操教育の分野へのつながりが深いことを認識すべきである。

指導する上で大切なのは、①子どもと共に感動する心を持ち、見聞きしたこと、触れたものなどが、感じたままに表現出来る。②教材を知的な遊びに作り変える（ゲーム性を持たせる）能力を持つ。③ある程度の演奏技術の習得である。

保育の中では、従来リズム遊び（遊戯）と言う形で全ての保育者によってリトミックもどきの活動が毎日行われているのである。リトミックという名称にこだわらず、自分なりの方法で、子どもの経験から題材を引き出し創造性を育ていこうという信念を持って臆することなく音楽教育に携わってほしいものである。

参考文献

- 1 F. W. アロノフ著 畑 玲子訳 1990 幼児と音楽 音楽之友社
- 2 ヴェトルーギナ 共著 高塚昌彦訳 1984 幼児音楽教育の方法 新読書社
- 3 小林洋子 他4名共著 1991 感性と表現のための音楽 学術図書出版社
- 4 中川弘一郎 他2名共著 1989 乳幼児の表現活動 黎明図書出版社
- 5 真篠 将 他2名共著 1987 幼児音楽適性診断テスト検査法 日本文化科学社
- 6 柏瀬愛子 1998 リトミック指導を通してみた音楽的諸能力発達の追跡調査（その1）

名古屋女子大学 紀要 第44号 人文・社会編